



隨筆集  
夜の紅茶  
江藤 淳

北 洋 社

## 著者略歴

1933年東京生れ。慶応義塾大学英文科卒業。文芸評論家。東京工業大学教授。「季刊藝術」編集同人。

著書 『夏目漱石』『奴隸の思想を排す』『作家は行動する』『海賊の唄』『作家論』『日附のある文章』『小林秀雄』（新潮社文学賞）『西洋の影』『文芸時評』『アメリカと私』『犬と私』『続文芸時評』『成熟と喪失』『崩壊からの創造』『考えるよろこび』『漱石とその時代Ⅰ・Ⅱ』（菊池寛賞）（野間文芸賞）『旅の話・犬の夢』『アメリカ再訪』『一族再会』『批評家の気儘な散歩』『文学と私・戦後と私』『海舟余波』『フロラ・フロラアヌと少年の物語』『決定版夏目漱石』『こもんせんす』『漱石とアーサー王傳説』『続こもんせんす』『海は甦えるⅠ・Ⅱ』『明治の群像Ⅰ』他に『江藤淳著作集』（全6巻）『続江藤淳著作集』（全5巻）『江藤淳全対話』（全4巻）がある。

## 夜の紅茶

一九七二年 二月一五日 第一刷発行  
一九七六年 二月二五日 第二五刷発行

著者 江藤 淳

発行者 伊藤金吾

発行者 北洋社

東京都千代田区富士見二一〇一  
電話 〇二六四〇五五二一〇二  
振替 東京一 一三三二四三

印刷所 精興社

製本所 牧製本

© Jun Eto 1972

乱丁・落丁本は取替えます

## 目次

I

モスクワの雀

レニングラード・十九世紀風

ロンドンの魅力

II

ロンドンの焼栗

賞・賞・酔い心地

龍の夢

漱石と虚子と

漱石のなかの風景

III

最初の電話

なくて七癖

|    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |
|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| 84 | 79 | 59 | 56 | 52 | 47 | 45 | 33 | 23 | 13 |
|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|

イルカとイノシシ

90

ゴールデン・ウィークの一日

95

失せ<sup>ゝ</sup>ものの探し

101

四つの葡萄色の瞳

107

アニイが来るまで

107

デザインちがい

109

うつむいていつくしむ

111

軽井沢とアニイ

113

この海獣のごときもの

115

年ごろになる

117

犬さまさま

120

夢の子たち

125

ミスター・エトウ・イズ・オン・ヴェケーション

130

風邪の愉しみ

舞の会

風邪と犬と清親きよちかと

夜の紅茶

#### IV

読書について

場所と私

#### V

私の朝食

足元

座右の書

書物とつきあう

大人のお菓子

136

142

147

152

159

176

195

197

198

200

203

新宿亀清楼由来

悲しみとやすらぎと

タングルウッドの音楽祭

若菜会に寄せる

永井龍男著『石版東京図絵』

寒椿一輪

最初の常陸丸

私の知っている小島さん

## VI

爆弾あられ

土が枯れる話

初詣

幻のライオン

204

205

207

211

213

215

218

221

227

232

237

242

父親の匂い

モーターゼーション

小判と木の葉

〈祭り〉と〈まつりごと〉

シンク・タンクとタンク・タンクロー

広場スクエアのある都会

スタイルのある話

## VII

見せる・見られる

在外研究員の窮状

ホスピタリズム

勉強株式会社

森林都市・東京

大学セミナー・ハウス 讃

ケインズ出でて文学亡ぶ？

日本研究家への叙勲

ネヴァー・オン・サンデー

新しい戦争小説

日本の色

あとがき

297

299

301

303

305

307

309

装幀 著者自装  
口絵 著者撮影



# 夜の紅茶







## モスクワの雀

「モスクワでは、スズメもロシア語でさえずる。ハトもふとっている」

と私がひとりごとをいったら、通訳のアラさんが、こっちを振り向いて、大きな眼をまるくしなから、

「なんですか、エトウさん。それは詩ですか？」

と訊いた。

「いや、詩じゃありません。エッセイの書き出しを考えていたんです」

と私はいった。モスクワ大学の、あの三十二階建ての本部の正面玄関前で、スズメが遊んでいるのを眺めていたときの話である。

実際モスクワでは、なにもかもがとほうもなく大きい。この大学本部前のアプローチだって、あまりに広大でむこうがかすんでいるくらいだ。かすんでいるのは小雨模様の天気の良い日も知れないが、雨に濡れた階段のはじっこで遊んでいるスズメもふぐらずめになっているし、プロ

ンズの彫像に糞をひっかけているハトもロシアのおばさんのようにふとっている。しかし、通訳のアラさんは大きくもないし、ふとってもない。彼女は栗色の髪と碧い眼をした敏捷な美少女で、コムソモールのメンバーである。

私は、日本文芸家協会の訪ソ使節団の一員として、このモスクワに來たのである。日本文芸家協会では、もう十何年も前から、ソ連作家同盟とのあいだに毎年使節団の交換をおこなっている。はじめのころは、いわゆる親ソ派の作家が主に選ばれていたようだが、このごろではそういう傾向もなくなつて、まったくイデオロギイ抜き親善訪問になつてゐる。この一九七〇年には、藤枝静男、城山三郎両氏と私が選ばれた。というわけで、九月二十六日、ハバロフスク号に乗つて横浜を出航し、ナホトカ、ハバロフスク経由ではるばるモスクワにやつて來たのである。

大きいといへば、ソ連という国そのものがおそろしく大きな国である。ナホトカから、ヴォストーク号というお召列車みたいな夜汽車に乗つて、十六時間ぐらいたつとやつとハバロフスクに着く。ずいぶん來たなと思つて地図を見ると、まだ沿海州のはじを少し走つただけで、ロシア人の概念におけるシベリアの、ほんの入口にたどりついただけだ。そこからアエロフロートの国内線に乗り換えて、モスクワに到着するまでに八時間かかる。羽田から逆の方向にむかつて日本航空の直航便に乗れば、太平洋をひとまたぎにしてサンフランシスコまで行つてしまう時間である。

へはーるばる來たぜ、はアこだてえエエ

という流行歌があるが、函館で「はるばる」なんて、小さい小さいといわなければならない。